

オーディオ実験室収載

モーツアルト盤を聴く(49)(HP 収載) —最新アナログシステムでの試聴(49)—

1. 始めに

前報(48)に引き続き、新たに入手したモーツアルトのアナログ盤を最新アナログシステムで試聴していきます。

2. モーツアルトのアナログ盤の試聴方法

モーツアルトのアナログ盤の由来およびアナログシステムの状況は前報(1)のとおりです。今回は、LINN LP-12 を使用します。

前報(9)から、アース関係が仮想アース Crystal E の導入(7)で報告のとおり、仮想アース Crystal E の追加とアース専用ケーブル Clone 2 が加わっていますが、LINN LP-124 のシステムに関係するのは、ZANDEN Model120 のアースケーブルが Western の撚り線から Clone 2 に代わっていることです。

加えて、仮想アース Crystal E の導入(15)で報告しましたように、スピーカーケーブルの結線に自作の仮想アースを接続しています。

音源は、新たに入手したモーツアルトのアナログ盤を使用していきますが、今回もピアノ協奏曲です。

ドイツグラモフォン MG2506

モーツアルト ピアノ協奏曲 20 番ニ短調

ピアノ協奏曲 21 番ハ長調

フリードリッヒ・グルダ (ピアノ)

クラウディオ・アバド指揮ウイーンフィル

2. モーツアルトのアナログ盤の試聴結果

ドイツグラモフォン盤ということで、TELDEC、逆相、第4時定数 High で聴いていきます。

ピアノ協奏曲 20 番は、前報(48)のブレンデルの演奏と同じ曲で、グルダの演奏は、流麗で歌うような演奏ですが、演奏とレーベルが異なるためか、音に芯があっかかりした演奏の印象を受けます。アバド指揮ウイーンフィルは、前報(48)のベトトヒャー指揮ウイーンフォルクスオパー管弦楽団やアンゲラー指揮ウイーン室内管弦楽団と同じくウイーンのオーケストラで、優雅な演奏スタイルはよく似ていますが、厚みがあって音がぎっしりと詰まった感じで、構成がしっかりした印象を受けます。

ピアノ協奏曲 21 番も同様の印象です。

3. まとめ

ターンテーブルアキュライザー、ダンパーフレーク、Crystal E の導入の交換などの総合的な効果として、グルダとアバド指揮ウイーンフィルの演奏スタイルが的確に把握できました。グルダのピアノについては、レーベルと演奏の異なる前報(48)との音の違い、アバド指揮ウイーンフィルについては、前報(48) のベットヒャー指揮ウイーンフォルクスオペ管弦楽団やアンゲラー指揮ウイーン室内管弦楽団との演奏の違いもよく分かります。

以上